



2026年 年頭司牧書簡



札幌教区の皆さんに
クリスマスと新年の
ご挨拶を送ります



カトリック札幌司教区
教区長 ベルナルド勝谷太治

シノドスは実施ステージへ

札幌教区の継続する課題

2021年から始まったシノドスの歩みは、教区ステージ、大陸ステージ、第1期、第2期のシノドス総会を経て、現在実施ステージに入っています。

昨年はこの流れの中で「聖年」の取り組みが教区内各地区でなされました。実施ステージはシノドス最終文書「シノドス流の教会」に基づき、今年5月まではその理解を深める期間とされています。

そして今年6月からの1年間はそれを実行する年、2027年からの1年間は評価の期間とし、2028年10月にバチカンで開催される「教会総会」へと向かっていきます。

各小教区においても、今のカトリック教会の進もうとしている方向性を理解するために、この最終文書「シノドス流の教会」の読み合わせ等を実施することを勧めします。

しかし、大切なことは、理念を理解することよりもそれを実施することです。あまり難しくとらえずに、シノドスのテーマ「交わり、参加、宣教」を各教会で実施し、その都度評価していくことの繰り返しが大切です。

昨年の年頭司牧書簡で触れたように、今札幌教区は、教区の宣教司牧体制をどのように変革していくべきかを検討しています。具体的ないきさつについては昨年の書簡をご覧ください。そこに書いていたように、教区諮問委員会や、札幌地区宣教司牧評議会の答申を得て、それに基づき、札幌地区からの実施に向けて以下の点について検討するようお願いしました。

- 今のブロック割の見直し（将来的な小教区統合を念頭に置いて）
- 教会委員会、運営委員会をブロックで統合一体化し教会規約を統一する
- 小教区会計のブロックへの一本化
- 小教区の特別会計（建築資金、修繕費等）の札幌地区あるいはブロックへの一本化
- 地区会計の設置

信徒参加の意思決定

プロセスの明確化

これらについては札幌地区宣教司牧評議会で検討が続けられています。具体的な提言がまとまればすぐに実施に

向けて動きたい考えですが、議論は地区宣司評の委員の皆さんのレベルで行われており、各小教区の信徒のレベルでの話し合いはまだなされていないのが現状です。シノドスの精神を実現するならば、全教会員が「参加」して今後の教区の教会像を話し合っていくことが大切であり、透明なプロセスでの合意形成が求められます。まさに、今札幌教区が抱えている問題を検討するには、シノドスの教会を実現しながらの作業となるべきです。

「シノドスの教会」

に向かつて

そこで重要なことは各共同体の識別、「教會的識別」です。最終文書「シノドス流の教会」の中に、このように書かれています。

「当事者全員の貢献を前提とする教會的識別はシノダリティーの条件であり、それならではの表現です。シノダリティーにおいて、交わり、宣教、参加が共に生きられるのです。すべての人の意見に耳を傾け

るならそれだけ識別は一層豊かになります。そのため識別の行程に幅広い参加を促すことが不可欠で、特にキリスト教的共同体や社会の隅にいる人々の関与に細やかな配慮が求められます。(82) 意思決定プロセスへの神の民全体の可能な限り幅広い参加を促進することはシノドス流の教会を推進するもつとも有効な道です。(87) 一

そのための方法として以下ことが提案されています。

- ① 識別の対象の明確な提示と、それを理解するための適切な情報と手段の提供
- ② 祈り、神のみことばへの傾聴、テーマについての熟慮、それらを持って準備するに適切な期間
- ③ 個人や集団の利己心にとらわれない内的姿勢と、共通善追求の熱意
- ④ 各人の発言への、真剣で敬意ある傾聴
- ⑤ 対立に蓋するのではなく、ギリギリの妥協点の模索でもなく、熱く心を燃え立たせる(ルカ24・32)とところから生まれる共通の感覚(コンセンサス)の可能な限り広範な追求

⑥ 参加者がそれぞれ共感の可否を表明するための、進行役による得られた共通の感覚(コンセンサス)の明文化と全参加者への提示

上記の識別を進める方法として今世界中で行われているのが「霊における会話」です。今世界の教会は、「ともに歩む教会」を実現するために本気で教会のメンタリティーを変えようとしています。札幌教区にとつては、まさに今直面している課題が、それを実現するための与えられたチャンスと考えられます。

小教区独自の課題

札幌教区に限らず、日本の教会の多くは小規模な教会です。地方の教会の多くは所属信徒のほとんどの顔が見える教会です。しかし、コロナ禍を経て、このつながりが崩れ、全国の教会から孤独に直面している高齢者が増えているという報告が上がっています。

ンダイジエストには全国から、直接郵送してほしいという一人暮らし、あるいは家族の中で自分だけが信者という高齢者から嘆願がきています。教会に通うことができず、唯一の教会とのつながりがカトリック新聞だったのですが、廃刊となり郵送されなくなりました。しかし、カトリックジャパンダイジエストではそれに対応できません。そのため、各小教区に郵送をお願いしているのですが、多くのお年寄りが、自分から教会にお願いするのをためらい、お金を払うので直接郵送してほしいと言ってきます。わたしは、この現状をむしろ、疎遠になってしまった方々や、独居老人の安否確認として、一方的な郵送で済ますのではなく、毎月、目を見て手渡しをするを教会メンバーにお願いしたいと思っています。そのためには、彼らから申し出を受ける前に、申し出ることをためらっている人もいることにも配慮した、きめ細かい対応をお願いします。確かに、一部の人たちから、今の小教区には手渡しで配布する人自体がいなくなっていることを理解してほしいという声もあります。

小教区によって事情は様々で、

一概に全国一律にこうしてほしいと言えません。高齢化の問題に限らず、障がい者や外国人等の孤独下に置かれている人たちが、その他、私たちが関わるように招かれていることはたくさんあるはず。そして小教区によって取り組むべき問題は千差万別でしょう。その中で、何もしいでいることは許されなないことです。

「船は停泊するために作られたのではない」

先日、日韓司教交流会が行なわれました。その中である韓国の司教が次のようなことをおっしゃっていて、とても印象に残っています。

「船は停泊しているときが一番安全です。しかし、船は停泊するために作られているのではなく、荒波を砕いて進んでいくように作られているのです。」

小教区において、自分たちの在り方を真剣に考える機会を持たないならば、私たちの教会は「停泊した船」になってしまします。

小教区活動評価

昨年の教区宣教司牧評議会で、いろいろな事業体で行っている自己評価を小教区でも実施してみたいという提案がなされました。普段無自覚でいることに気づくために、客観的な指針によって自己評価し、見える化する試みは有効かもしれません。

シノドスの教会は識別を通して、「ともに歩む教会」をどう実現するかを問うています。どんなに小さな共同体であっても、そして大きな教会においても、すべての人が参加する教会をめざして、識別を日々の教会活動に取り入れ、未来の教会を築いていっていただきたいと願います。

標を立てることはとても有用でしょう。

例えば下記の
ような点で評価
してみてもどう
でしょうか。

下記の内容は、

どれも今まで教
区が課題として
きたものでこれ
までの年頭司牧
書簡でもたびた
び触れてきたも
のです。自分た
ちの共同体がど
の点で優れてお
り、どの点が足
りないか、それ
をもって何をす
べきかを識別し
て、宣教司牧目

分野	内容	評価の視点(例)
①典礼・祈りの生活	ミサ、秘跡、祈りの充実度	ミサ参加者数だけでなく、祈りの深まり・奉仕者育成
②宣教・福音化活動	教会外への働きかけ	洗礼志願者、教会外活動(SNS、地域奉仕など)
③教育・養成	信仰養成、聖書講座、子ども・青年活動、多文化共生	教理教育、聖書講座への参加度、多国籍信徒が教会にとって単なる「信徒」ではなく、共同宣教師・リーダーになる道を開く
④社会活動(カリタス)	社会奉仕、高齢者弱者支援、訪問活動	カリタス活動の範囲と信徒の関与度
⑤共同体形成	信徒間の交流(分かち合い)、委員会運営	対話の雰囲気、共働精神、指導層の透明性



帯広・柏林台教会共同体の統合 と柏林台教会閉堂について



【柏林台教会】 シエナの聖ベルナルディノ

柏林台教会の開設は1961年(昭和36年)、富澤孝彦司教が根室教会献堂式の帰途帯広に立ち寄られ、当時の釧路地区長ボナヴェントウラ・トヌッティ師に対して、帯広に二つ目の小教区設置を示唆されたことに始まる。

帯広市の西部に造成され急速に発展する柏林台団地に2,310㎡の土地を取得。先ず、1962年9月に「柏林台カトリック幼稚園」が新築祝別された。

2026年1月1日、釧路地区の帯広教会・柏林台教会の二つの小教区共同体を帯広小教区共同体とし、現在の帯広教会で一致の中、新たに福音宣教を始めることになりました。

柏林台教会は、2025年12月31日をもって閉堂となります。

2026年3月20日(金・祝)11時より柏林台教会への感謝のミサを勝谷司教司式のもと執り行います。

皆さまも柏林台教会のためにお祈りください。

● 教会名は帯広教会

電話・FAXは現在の帯広教会を使用。柏林台教会の電話・FAXは12月31日をもって利用停止。

● 柏林台教会所属の方々の信徒籍台帳、並びに各種台帳の取り扱いについては、上記の日より帯広教会として処理。

● 柏林台教会解体については、現時点で詳細未定。引越しや事後処理などではばらばら柏林台教会への出入りが必要のため、作業終了次第、2026年度中に解体に取り掛かる予定。

次いで1964年、幼稚園の拡充工事と共に聖堂が落成し、帯広教会から柏林台教会が分離独立、信徒70人が移籍した。初代主任司祭には釧路地区長兼務でトヌッティ師が就任。その後も教勢伸展し、幼稚園入園希望者の増加を機に増改築を行い、1969年新聖堂を建設し、同年7月献堂された。当小教区の特徴は新興団地だけに他の小教区に比べ信徒の平均年齢が低いことである。

(札幌司教区昇格50周年記念誌『躍進』より)

全国担当者会議報告

全国典礼担当者会議

9月8日から10日に、御聖体の宣教クララ修道会軽井沢修道院で、全国典礼担当者会議が行われました。通常開催地である軽井沢修道院は、標高1000m程度の台地に位置し、猛暑日が続く関東各地とは違い、北海道よりも涼しいくらいの気候でした。

今年には「聖週間の典礼について」受難の主日・聖なる過越の三日間」というテーマの報告で、現在も『ミサ典礼書』の改訂作業が行われていますが、特に聖週間の典礼の改訂作業についての解説がありました。

その中で、司教協議会で既に承認されている『四旬節・聖なる過越の三日間・復活の典礼に関する補足事項』（2019年発行）は、皆さんの共同体でも実践されていると思いますが、例えば、7「主のエルサレム入城の…」とき、信者だけでなく司式者と奉仕者も枝を持つ」ことや、受難朗読については10「キ

リストのことばを朗読する司祭も、祭壇からではなく朗読台から朗読する」と指示されていることがあります。

また、復活徹夜祭の43「旧約聖書の7つの朗読は、可能な場合どこにおいてもすべてを朗読することが求められる」こと、「司牧的理由から朗読の数を減らす場合」、従来は「重大な理由があれば二つにすることができるとなっていました」が、「少なくとも5つの朗読を選び」ことが再確認されました。皆さんも聖週間に向けて確認していただければと思います。

2026年度も9月7日から9日の間、御聖体の宣教クララ修道会軽井沢修道院で会議が開かれます。

（札幌教区典礼委員会委員長・佐藤謙一）

カリタスジャパン

11月13日から14日まで、東京市ヶ谷のルーテル市ヶ谷センターおよび援助修道会管区本部にて、全国から14教区の担当者が集い、

カリタスジャパン定例全国教区担当者会議が開催されました。主な議題は、四旬節キャンペーン、内規改訂、国内援助方針についてでした。

・四旬節キャンペーン

「四旬節の献金は愛の奉仕の業です。」という成井大介責任司教の説明から会議が始まりました。「四旬節愛の献金はキリストが教える愛の義務であって、災害募金のような個人の自由に基づくものではない事を、あらためて信仰者として問いかけ、広めてまいりましょう。」と力強く説明されました。

カリタスジャパンは徹底して愛の奉仕を具現化していく組織で、すべての教区が主体的に歩みます。私達教区担当者は非力であっても、多くの人を繋げていくために日々歩みます。

・内規改訂

この6月から司教協議会の組織が改編され、カリタスジャパンは他の社会司教委員会に影響を受けない独立した組織として、ERST（災害時の緊急対策支援チーム）を内包して進むこととなりました。また教区担当者会



区担当者会の内規も見直しを行い、歩み始めました。

・国内援助方針

カリタスジャパンは国外だけではなく、国内の支援のためにも動いています。先の内規の改訂に伴い、国内の支援がよりスムーズに、また漏れることなくできるよう、検討され続けています。支援のための手続きも確認され、非継続的な支援ならば教区担当者と共に、カリタスジャパンに援助申請が行えるよう整備されてきました。

・教区担当者の交わり

昨今の支援は、全国からのよ

り多くの情報と、各教区の独自の歩みから新たな支援体制を学び合い、それぞれの教区が進んでいきます。そのため、年に一度のこの会議は、大きな励みとなります。今回はカリタスジャパン作成のポロシャツを纏い、あらためて愛の業を一致して進む意識を高めました。

今後、各教区でもカリタスジャパンからの情報を得ながら、愛の奉仕の業が積極的に行われるようにと心に誓い、ミサをもつて解散しました。

（カリタスジャパン札幌教区担当司祭・松村繁彦）

各地区カトリック大会

■札幌地区

札幌地区使徒職大会が10月5日(日)藤女子大学で開催されました。大会テーマは「キリストとの出会いII」。

昨年に引き続き日本カトリック典礼委員会の宮越俊光氏を講師に招き、「キリストとの出会い」シンボルで味わう典礼・礼拝」と題する講演をいただきました。

キリスト教の典礼・礼拝では、所作、祭具、祭服、場所など多様なシンボルが用いられます。講演を聞き、典礼におけるシンボルの理解を深め、豊かな典礼・ミサに結びつけたいという思いを新たにしました。

『古来、多くの文化や宗教は、人間が神的、超越的、神秘的な何ものかを捉えるために、人間の感覚で理解できる自然物や図像やしぐさなどをシンボル(象徴)として用いてきた。シンボルは「それを用いる人々がシンボルの示す意味についての共通理解をもっているときに機能し、共同体のきずなを深める」。キリスト教においては何よりも「わたしを見た者は、父を見た」(ヨハネ14・9)という言葉の



交換し合いました。この話し合いは「小教区の壁を越えた信徒の交わり」を体現する場となりました。

午後からは、勝谷司教司式のミサで約450名の方が現存するキリストを意識して典礼に与りました。聖歌隊は少人数でしたが、ミサを構成する大事な役割であることを理解し、会衆とともに賛美の歌を一生懸命に歌いました。

ミサの中で合同堅信式があり、堅信を受けた12名の信徒はミサ後に会場で紹介され、喜びと拍手に包まれました。より良い大会の開催にむけて、大会スタイル(次第)についての感想、意見を各小教区に聞いています。(札幌地区宣教司牧評議会広報担当・能町浄彦)

■苫小牧地区

苫小牧地区信徒使徒職大会が10月19日、室蘭市民会館で、寄り添う教会を目指して「私たちひとり一人が出来ること」をテーマに開催されました。大会は苫小牧と室蘭、隔年交互に開催されており、今年度は室蘭で行われました。

当日は天候にも恵まれ、苫小牧地区の6つの教会の信徒をはじめ、司教、司祭、シスターも

含めて95名参加しました。大会はテーマに沿って、「霊における会話」の体験実施としました。「霊における会話」の講演をSr.松宮るみ子氏、具体的な取り組みをSr.宮崎妙子氏、支援・指導を西田淳子氏(月寒教会)と森朝美氏(小樽教会)にお願いしました。

開会式の後、Sr.松宮るみ子氏のテーマに沿った講演があり、次にSr.宮崎妙子氏の「霊における会話」の進め方の説明がありました。信徒に加え、札幌地区

宣司評メンバーの上野浩氏、柳澤辰也氏、阿部包氏の参加を得て、14グループに分かれての体験となりました。午後からは、「霊における会話」の体験の感想や今後の取り組みなどについて小教区グループで分かち合いの機会を設け、最後に感謝のミサ、閉会式で終わりました。

「霊における会話」は森氏、西田氏の進行のもとスムーズに進められ、全員の参加により、各自、聖霊の助けを求め、祈りの中で体験となり、大会は成功であったと思います。テーマに沿った会話の内容は、各グループで様々であり、グループの発表は時間の関係で限られ、内容を深められなかったのは、大会の構成として、止むを得なかつ

たことと思います。その中でテーマの根本問題として、寄り添うべき教会共同体そのものが消滅の危機にある小教区もあり、テーマの選定に配慮が必要ではなかったかの発言もあり、反省材料となりました。

今後、「霊における会話」の手法を各小教区の活動や運営、また、各自の信仰生活にどのようになかすか課題がありますが、勝谷司教の話のようにこの体験を繰り返し経験することで、聖霊の働きに聴く習慣を身に着け、日々の信仰生活に生かせるように取り組むことが大切ではないかと考えさせられた大会となりました。(苫小牧地区信徒使徒職大会実行委員長・松岡健二)



■旭川地区

10月26日(日)、旭川五条教会において「第69回旭川地区カトリック大会」が開かれ、地区内外から224名が集まりました。今年のテーマは「希望の巡礼者」ともつながり歩む14の希望の光。2025年の聖年に向け、地区内14小教区が互いに結ばれ、喜びと祈りのうちに未来へ歩み出すことを願って企画しました。

大会では、中心となる司教ミサのほか、いくつかの新しい取り組みが行われました。

一つ目は「希望の巡礼帳」と「教会スタンプ」の作成・配布です。聖年にあたり巡礼の機会を広げるため、指定巡礼教会以外の小教区も訪れてもらえるように工夫しました。大会前から巡礼帳を手に各教会を巡る信徒の姿も見られました。当日の午前は旭川市内の旭川六条・大町、神居の3教会が巡礼を受け入れ、お茶などで巡礼者を温かく迎えてくださいました。また午後からは、会場となる旭川五条教会でもウェルカムカフェで迎えてくれました。迎えられる喜びを通して、これからの教会の在り方を考える良い機会にもなりました。

二つ目は「私の祈りカード」

です。大会に参加できない方もつながりを感じていただけるよう、祈りを書いていただき、ミサの中で共に奉獻しました。祈ることの大切さを分かち合い、普段教会から離れている方へ声がけを行う機会にもなりました。

三つ目は、「お楽しみ抽選会」です。14小教区それぞれの「ご当地プレゼント」が用意され、各教会の「今ある希望」を紹介する時間にもなりました。

エリアが広く、遠く離れた旭川地区で、年に一度集まることも容易ではありません。しかし、祈りと喜びを分かち合い、共に希望を見いだすための大会となりました。

2026年は第70回という節目を迎えます。さらに多くの巡礼者や信徒が各教会を訪れ、教会同士のつながりが深まることを願いながら、これからも希望を持って歩み続けていきたいと思えます。

大会実施にご協力くださったすべての皆さま、そして参加された皆さまに心より感謝申し上げます。次回も、楽しく素敵なお大会にしましょう。

(実行委員会委員長・

小寺光一)



■北見地区

8月31日(日)北見地区カトリック大会が開催されました。午前中は合同ミサが開催され、



北見、遠軽、美幌、網走、紋別の各教会から60名ほどの参加がありました。今年度は聖年にあたるということで、北見教会の上杉神父、内藤神父に加え、札幌から奇浩培(キ・ホベ)神父をお招きし、共同回心式も同時に行い、参加者全員が全免償を受けることができるようにしました。

午後からは、「北見地区の未来への展望と希望」をテーマとし、上杉神父の基調報告のあと3人の各教会の信者の発表があり、今後の北見地区の教会の在り方について考える場を持ちました。

上杉神父からは、北見地区では、教区ニュースで示された司牧書簡の札幌地区の変革に触れ、先達の神父や信徒の努力により会計の一本化や特別会計の一本化は成し遂げられているが、道内の厳しい状況から、教区6地区制(函館・札幌・苫小牧・旭川・北見・釧路)の見直しがないとも言えず、その場合、どのような運営体制にするのか今から各教会が連携を深め、備えておかなければならないことが強調されました。

その後、北見教会からは、過去の活動の実践を踏まえ、現在

の教会運営に対する提言、現在の教会運営の実践について報告されました。

また、紋別教会からは、多くのベトナム青年が集う教会となった経緯、また国際的教会の運営について心がけていることなどの報告がありました。

少子高齢化が進み、信徒数が減少する厳しい現実ではありませんが、各教会ではプラス面の芽生えもあり、希望を持って自分たちの役割を果たすことが必要と感じた大会でした。

(北見教会・笹原和広)



札幌教区宣教司牧評議会



審議の時間となりました。

今回の審議のテーマは、前回からの引き続きで「年頭司牧書簡を、信徒の皆さんが読んでくれているかどうか」でした。あるいは読んでもらうためには、どのようなことが必要で、そのためにはどのような取り組みをしたら良いか、について話し合いました。

教会の皆さんの高齢化も進み、字が読みにくくなる中で、教区ニュースを読まなくなっている現状や、地区や小教区によって意識の在り方に差がある、などの意見が出されました。

11月1日に、札幌教区カトリックセンターにて、各地区代表評議員が集まり（一部はオンラインで参加）、札幌教区宣教司牧評議会が開催されました。

年に二度行われるこの評議会は、札幌教区のすべての信徒に、司教が語りかける場であり、また司教から評議員を通して、札幌教区の人々に問いかけをする場です。

午前は、各地区の活動状況について報告があり、午後からは

区でも、議論していかねければならない切迫した状況であることも意見として出されました。

活発な意見が交わされ、今後、年頭司牧書簡は、司教からの語りかけとして、それぞれの受け止めと、それに対する行動が大切であることが確認され、評議会は終了しました。

今回は2026年6月13日（土）、同センターにて開催される予定です。

（札幌教区宣教司牧評議会運営委員長・佐久間力）

教区事務局からお知らせ

■教区事務局年末年始休業
12月27日(土)～1月5日(月)
1月6日(火)より通常業務
を行います



写真の再利用



フランシスコ会
旭川修道院
山本孝神父

私は現在病気療養中で、殆ど神父休業中の状態だ。

2019年4月末にミサに行っていて身体が動かなくなりました。4回目の脳梗塞の発症だった。7月には退院し、歩行器を使って修道院内の移動ができるまで回復した。しかし、8月に5回目の発症をして、また入院生活になってしまった。

2020年2月に退院し、それ以後は歩行困難で車椅子の生活になった。修道院での共同生活が困難になり、信者さんの経営する住宅型有料老人ホームにお世話になることにした。

私の最初の脳梗塞は1999年で52歳の時だった。その後20年間に何度も脳の血管が詰まり、とうとう歩行と左半身が不自由になってしまった。さらに後遺症で、嚥下機能が低下し食べ物でむせやすくなり、言葉も音が鼻の方にぬけるため、はつきり発音ができなくなった。

2021年聖ヨセフ年に、「教会のミサには行けなくても何かできることを」と信者

さんに誘われ、聖ヨセフ年の通信講座をスマホで行った。この年の暮れから月に何度か福祉タクシーを利用して車椅子で旭川市内の教会に行き、片手での主日ミサをさせてもらえるようになった。入居施設も身体が不自由で要介護の方が多く入っている、サービスタ付き高齢者住宅に転居した。修道院から「今まで使っていた部屋を空けて欲しい」と言われたので、本や衣類など持ち物の大部分を処分した。神父として人前に出ることはもう無いと思っていたので、ローマンカラーやスーツなど全部処分した。ただ、自分が棺桶に入る時に着せてもらうため、修道服だけはひとつ残しておいた。

今回、教区ニュースで修道服を着た写真が欲しいと言われたのは、死亡のお知らせにも使えるからかなと推測してしまっただけだ。私は来年、司祭叙階から50年になるので神様に感謝している。しかし、神様はどうしてこんな役立たずを神父にしたのかと、申し訳なく思っている。

日本カトリック正義と平和全国集会

2025仙台大 希望は欺かない

—大震災から14年つなく思い 国籍を超えて歩む平和への道—

2025年10月11日(土) 13日(月)・祝

仙台教区の元寺小路教会をメイン会場に第42回全国集会が開催された。参加者200名、北海道から13名の参加に加え、14年前の東日本大震災を機に脱原発の強い思いで交流を重ねていた韓国からも、司祭信徒等23名が参加した。

初日11日(土)のフィールドワークは、南相馬、大船渡・南三陸、石巻・女川の3か所での自由参加で行われ、参加者たちは現地ならではの貴重な体験を得た。(詳細はJP通信125号参照)

12日(日)、ガクタン・エドガル仙台教区司教の感謝と歓迎の開会の挨拶に始まり、基調講演では、カリタス南相馬の幸田和生司教が大震災14年の歩みを振り返った。シンポジウムには宮城県で脱原発の活動をしている館脇章宏氏と、写真家で南相馬に「おれたちの伝承館」を作った中筋純氏が「原発と向き合う中から、目指すべき未来を探って」をテーマにそれぞれの取り組み

と思いを話された。

13日(月)・祝の分科会は「戦後80年広島原爆、教皇フランシスコ」、「沖繩の夢」戦争から非武装中立平和特区へ」、「福島原発事故の実相を伝え続けていくために」、「東日本大震災14年の歩み」、「再稼働女川原発の危うさと未来への道筋」、「世界情勢 平和の行方 ストップ・ジェノサイドinガザ他」、「ハンセン病問題の過ちを繰り返さないために」、「教会とつながる実習生たちの光と影」、「ホームレス支援活動」等、国内外のどれもが大切で、興味深い内容の9分科会だった。参加先を悩みながらも選び、各地からの参加者と共に思考した。

1975年に第1回全国集会が東京で開催されてから、ちょうど50年の節目の仙台大会だったが、たくさんのお出合いがあり、過去から学び伝え続けていくことの大切さを実感した。神の望まれる正義と平和の実現を諦めることなく、小さくされた人たちのために、



これからも仲間と教会と社会とつながっていきたいと思う。(札幌教区正義と平和協議会・藤田春美)

北海道カトリック中学・高等学校連盟生徒全道大会

10月9日(木) 10日(金)、北海道青少年会館 Compass (札幌市南区)を会場に、北海道カトリック中学・高等学校連盟生徒全道大会が開催された。

旭川藤屋高等学校が当番校を務め、道内6校(北見藤、札幌光星、海星学院、函館ラ・サール、函館日見台学園、旭川藤屋)が参加し、カトリック校同士の交流を深めた。

森晃太郎師(イエズス会の指導のもと、「Beyond the Border」の向こう側)の活動を行った。大会中には、講話とアクティビティを通して、自分自身が生きていく上でのCore(ブレない軸)について、自分をとりまく環境や他者との間のBorder(壁・境界)を意識化する体験から、Borderの向こう側への歩みについて考えた。分かち合いやグループワークでは、講話を通して考えたこと、自分自身の学校生活で感じたBorderについてなど、生徒同士が活発に意見交換を行っている様子が見られた。



夕の祈りの中では、活動を通して感じたことや自分自身の過去を内省する時間をもった。ミサでは、2日間を通して感じたことをグループごとの共同祈願としてささげ、聖体拝領時には、一人一人の生徒に神父が祝福を下された。

大会は生徒一人一人が、自分たちの間にある「Border」に真剣に向き合う場となり、大きな恵みと喜びに満ちたものとなった。(旭川藤屋高等学校・金子理沙)

盛式誓願

おめでとうございます！



11月1日諸聖人の祭日に燈台の聖母トラピスト修道院聖堂において、白浜司教司式により、バジリオ後藤正史神父の盛式誓願式が行われました。皆様のこれまでのお祈りに感謝申し上げます。

【略歴】

- 1954年1月5日生まれ
(北海道北斗市当別)
- 1954年1月5日受洗
(当別教会)
- 1990年3月21日叙階
(広島教区)
- 2020年5月入会
(燈台の聖母トラピスト修道院)
- 2022年11月初誓願
- 2025年11月盛式誓願

性虐待被害者のための

祈りと償いの日

2026年3月6日(金)

2016年、教皇フランシスコは、子どもに対する教会のメンバーの責任について明確に意識できるよう、神により頼む日として「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を設けるよう全世界の司教団に通達されました。これを受けて日本の教会は、「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を四旬節第2金曜日と定めました。この日は、四旬節の金曜日という回心にふさわしい日であり、同時に象徴的な日でもあります。それぞれ

の教区司教の呼びかけに従って、四旬節の間、あるいは前後の日曜日などを使って、祈りと償い、被害者の痛みを学ぶ機会を作るよう呼びかけられています。(札幌教区ニュース2024年1月号No.44参照)

札幌教区では例年、各小教区で取り進むよう勝谷司教より指示が出され、各々実施していることと思っていました。が、まだまだその意識は広がっておらず、祈りやミサの実施が少ない状態です。私たちは「知る」「理解する」「痛むこと」を通して向き合っていきます。これは回心の流れと同じです。歴史を超えて同じ信仰、同じ教会の下で歩んだ仲間による加害者と被害者のそれぞれを思い起こし、共同回心や慰めのための祈りを行うことが求められます。

私たちは知らず知らずのうちに各種のハラスメントを行っていないでしょうか。すべてのハラスメントを取り払うことは難しいかもしれません。しかし、「私もハラスメントをしているのでは？」という

思いを持ち、兄弟姉妹と共に償いを自らしてまいりましょう。その謙虚さこそ、償いのスタートなのです。そして現実にも、今も苦しみを抱える人が共同体の中にいるのです。私たちはこのことを強く心に刻み、それぞれが祈り、償いを求める日になるように、各小教区での取り組みをあらためてお願いします。

(札幌司教区ハラスメント対応デスク担当司祭・松村繁彦)



カトリック札幌司教区
ハラスメント対応デスク

080-2879-3168

火曜～金曜 12:00～16:00
祝日夏季冬季休業日除く

✉ sapporo.harassmentdesk@gmail.com



■お知らせ■

白石共同墓地（合葬墓）の納骨期間は原則4月から11月までです。積雪期間（12月から3月）は納骨を行いません。詳しくは右記教区本部事務局までお問い合わせください。

クリプト札幌

カトリック札幌司教区納骨堂
札幌教区カトリックセンター地下
家族壇568区画・合葬壇730
天候問わずいつでも墓参可能



白石共同墓

札幌市白石区平和通10丁目北5-1
札幌市白石本通墓地

札幌教区の司祭・修道者・信徒なら
びにその家族を対象とした合葬墓

お問い合わせ 〒060-0031 札幌市中央区北一条東6丁目10 札幌司教区本部事務局
電話 ■白石共同墓：011-241-2785 ■クリプト札幌：011-221-4244
いずれも平日9:00～17:00（土曜日曜日祝日及び夏季冬季休業を除く）

今回タイトルにしたのは、2025年秋、北海道新聞が取り組んだ特集記事のテーマで、副題は「外国人と生きる」。その特集の1回目の末尾にはこう書かれていた。「日本で暮らす外国人は2070年に総人口の1割に達するとされる。ただSNSには外国籍の隣人を敵視する投稿があふれ、政治家も排外主義をあおるような発言を繰り返している。われわれは同じ社会を生きる外国人とどう向き合うべきなのか。」

みなさんは、教会のミサに与る外国人とどう向き合うべきか：そんな話を教会ですらしたことあるだろうか。シノドスの取り組みなどでこの話題を出した方はいるだろうか。

2025年夏の選挙から始まった外国人に対する排斥運動は、北海道全体にも広がり、大きな影響を与えている。スキー場等のリゾート地に建つ豪華な建物と外国人観光客の話は、随分前から取りざたされていたが、道東のメカソーラー事業は環境破壊に繋がり、外国資本が背景にあるとして、それを放置している北海道知事の退陣を求

めるデモに発展した。そして、そこから飛び火したかのように勢いを増した人々は、次々と不確かな情報を拡散し始めた。札幌市では閉校した小学校跡地の公募提案型売却が民間のインタナーショナルスクールに決まったことに対して、江別市ではパキスタム教のマスジドによる市街化調整区域の違法建築に対して、地域外の人々が声をあげている。不安や不満を煽り、その原因は外国人であると地域の秩序を乱しているのは誰だろうか。

ともてまをよぶ

岐路の多様性

国も「秩序ある共生社会」や「外国人の適正管理」といった言葉のもとで、排外主義的な言動や政策を強めている中、私たちは、遠巻きにこの流れを見ていて良いのだろうか。今、必要なのはすべての人が人間として尊重され、差別なく安心して暮らせる社会である。だからこそ教会が求める社会ではないだろうか。だとしたら、多様な社会に対してどう向き合っていくのかを考え、動き出す2026年であって欲しい。

(札幌教区難民移住移動者委員会)

西 千津

訃報

◆パリ外国宣教会



ジュレ・ロー 神父

9月11日未明、フランスの入院先にて神様のみもとに召されました。享年94歳。長きにわたり日本における宣教に従事されてこられたジュレ・ロー神父の永遠の安息をお祈りください。

【略歴】

1956年(昭和31年) 来日

1958年(昭和33年) 横浜教区で八幡教会助任(静岡)、浜

松教会助任、八幡教会主任、清水

水教会主任を歴任

1968年(昭和43年) 札幌教区で湯の川教会主任(函館)

1980年(昭和55年) 宮前町教会主任(函館)

1984年(昭和59年) 月寒教会主任(札幌)

2016年(平成28年) フランスに帰国

※帰国後パリのミッション会老人施設、その後マルセイユ近くの施設で療養

2025年(令和7年) 9月11日 永眠

◆殉教者聖ゲオルギオの

フランススコ修道会



Sr. M. スタニスラ 森岡千恵子

10月18日月形藤の園にて神様のみもとに召されました。93歳。

【略歴】

1932年1月15日生まれ

1949年3月25日受洗

1955年3月25日入会

1963年8月12日終生誓願

2017年11月23日ダイヤモンド祝



Sr. M. フィデス 太田和子

11月19日札幌マリアア院にて神様のみもとに召されました。91歳。

【略歴】

1933年12月7日生まれ

1952年8月15日受洗

1957年3月25日入会

1967年8月12日終生誓願

2020年11月23日ダイヤモンド祝



先日ある教会のミサの中で入門式を行った。希望ある入門者たちは求道者として新たな一歩を踏み出したのだが、自分自身も求道者であることを思い出し、次の事を自ら肝に銘じたのだ。

求道者は、その宗教に身を投じるならば自らを鍛える責務がある。山岳信仰を持つ修験者は修験道の行者として、試験を通して験力(げんりき)を得、衆生(しゅうじょう)を命ある被造物(せいぶつ)の救いの為に働く。イエスの荒野野での経験と同義。

教皇フランススコ訪日時に「すべてのいのちを守るため」を私たちに伝えた。日本の司教団も9月にはそのために祈るように私たちに伝えてくれる。私たちがどんな形であれ、すべての生きとし生けるものの救いの為に、自ら修験道の体験はどこかで要求されるのだろうか。すなわちストイックさを欠かしてはならないのだ。何故ならば、自分の為に生きるキリスト教ではないのである。私は時間ができれば距離を問わず徒歩巡礼を大切にして

(松村繁彦)